

特定非営利活動法人 緑地雑草科学研究所 2025年3月発行

ニュースレター 17号

目次

報告事項	1
活動報告	1
会員投稿記事	2
編集後記	4



春を告げるオオイヌノフグリ (2025.3 京都)



報告事項

令和7年度総会についてのお知らせ

令和7年度の総会につきましては、3月28日に書面表決にて実施し、全議案が可決承認となりました。会員の皆様におかれましては、総会成立にご協力いただき誠にありがとうございました。

さて、去年は全国4カ所にて雑草インストラクターの集研修を実施し、懐かしい面々と実際に顔を合わせる機会もありました。また、一昨年福井県で実施した荒廃農地の雑草調査も、当NPO内に留まらず次の具体的な取り組みに発展していく気配を感じています。

今後も、オンライン講演会などのこれまでの活動に加え、各事業が連携した新たな取り組みも計画し、ニュースレター等を通じより活発に情報発信に努めてきたいと存じます。皆様のご参加、ご参画いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、過去の活動については当法人のウェブサイトの事業活動をご覧ください。ニュースレターのバックナンバーも掲載しております。

<https://www.bousou-ken.org/action.html#newsletter>

事務局長 佐治健介



活動報告

草刈り除草ワールド2025 セミナー実施報告

3月11日～14日の4日間、東京ビッグサイトにて草刈り・除草ワールド2025が開催され、その中で当研究所より竹内氏と私(佐治)の2名がセミナー講演を行いました(図1)。私の担当したセミナーでは、「雑草問題解決へのアプローチ～これからの雑草管理で知っておくべきこと～」の題

で、個別に雑草管理を行う前に押さえておくべき事項について、当研究所で学んだことを中心に講演を行いました。また、竹内氏のセミナーでは「農業場面における雑草管理とその活用」の演目で、農業分野に焦点をあてた雑草管理の目的の解説と、植物を活用した事例の紹介を行いました。

私自身、草刈り除草ワールドで講演を行うのは約3年ぶりではありましたが、2人が担当したセミナーでは各60～70名ほどの方々に参加いただきました。また、セミナー後

の名刺交換の際には様々な雑草の悩みを伺う機会もあり、雑草問題がますます顕在化していること、並びに当研究所の発信する情報への期待の高さも感じた一日でした。

佐治健介



図1. セミナー講演の様子 左：佐治氏 右：竹内氏



株式会社牧野造園 代表取締役 牧野幸太

弊社は、昭和56年に先代が植木屋として始め、平成元年に有限会社 牧野造園として会社を設立し、平成11年に株式会社 牧野造園として組織変更をしたことを起点に、今年で26周年を迎える造園会社です。従業員7名（2024年）の小規模事業者になりますが、1名は会社設立当初から、3名は25年近く業務に従事しており、こうした経験豊かな社員の存在のおかげで現在に至って参りました。

私たちの業務は、緑地の管理計画を策定し、実行すること、そして、それとは別に緑地の意匠をかたちにすることです。前者の範囲は、都市公園や公共施設緑地、民間施設緑地などに区分される「施設緑地」と緑地の保全や緑化を推進するために、法律や条例などに基づく制度による緑地などに区分される「地域制緑地」の両方に跨ります。一方、後者については、施設緑地、とりわけ民間施設緑地を中心

に手掛けています。

●雑草とのかかわり

ある民間施設緑地の年間管理を担当していた私は、草刈りをしているにもかかわらず、クズやイタドリのパイオマス量が前年同時期よりも明らかに増加している光景を目の当たりにして、このままでは採算が取れなくなると気を落としたことがありましたが、担当が外れ雑草に悩むことはなくなりました。ところが2015年に樹林地(緑地協定区域)を管理する機会を頂いたことで、初めて施設緑地の管理の仕方(慣行的な管理)では手の打ちようがない現実を突きつけられました。試行錯誤の末、数年かけて荒れ果てていない緑地になりました(図2)。

ここでの経験が、後にNPO 法人緑地雑草研究所での講義の理解にとっても参考になりました。特に強烈に印象に残

っているのは「ブラックリスト方式とホワイトリスト方式」「結果管理と要因管理」「増える・広がる・変わる」のお話です。このエリアでブラックリストに挙げているのはクズ、トウジュロ、アメリカオニアザミ、アメリカセンダングサとしています。当 NPO 共通の用語があることで第三者の方々に雑草管理のお話をするときにとっても助かっています。

現在、弊社では『土壌を保全し、草木を育てる』の使命のもと、“荒廃した緑地を減らす”取り組みを行っています。その一つに当 NPO で教えて頂いた暖地型の西洋芝である

セントオーガスチングラスによる植生転換を行っております(図3)。施工は試験的な意味もあり、費用を抑えて市松模様で芝張りを行いました。しかしながら、費用が抑えられる一方で、風や日照による乾燥で芝草の活着にばらつきがでました。また、一年生イネ科雑草が8月上旬頃に一齐に発芽し生長しました。幸い東向きの緑地で西日の影響はなく、客土はガラなどの夾雑物がほとんどない上、梅雨時期の雨にも恵まれたことで、灌水せずに夏を乗り切ることが出来ました。

今後も、NPO 法人緑地雑草研究所様および会員の皆様とともに共通の目的のもと一歩ずつ進んで参ります。



図2. ブラックリスト方式での緑地管理
林床は、在来のササ類を中心とし、ブラックリスト方式で地域制緑地を管理しています。ホウチャクソウの群落が見られます。



図3. セントオーガスチングラスによる植生転換

緑地雑草害対策の不都合な現実：除草剤は嫌い！

雑草ジャーナリスト 井島 寛

昨今の生活圏に見られる雑草の蔓延は、温暖化の影響もありますが、何よりも適切な雑草管理が行われていないことが原因です。国際社会で国民の勤勉性と科学技術の高さ

に定評のある日本人が、なぜ雑草による被害には無頓着なのか。結論から言うと、雑草汚染による環境・経済的損失をリスクとは認知せず、雑草害を取り除くための除草剤と

呼ばれる化学物質の使用をリスクと捉えているからです。雑草害リスクは実害ですが、除草剤リスクは仮想のリスクです。なぜこうなのかは、100年にも及ぶ欧米の雑草害管理技術の発展から生まれた除草剤を、日本の先達が除草作業の省力的技術として導入したことによると思われます。雑草害管理技術は、生活・生産活動・環境において直接・間接を問わず負の影響を及ぼす雑草種を特定し、その経済的被害の排除を目指して発展してきました。その歴史の中で生まれたのが除草剤であり、この精緻な機能的資材の出現によって、農業分野、牧畜分野、産業分野、公衆衛生分野、自然環境分野において、雑草による様々な経済被害の拡大防止が可能になったのです。そして今日、欧米諸国がそれぞれ「雑草管理法：Weed Act」を制定するとともに有害雑草のブラックリストを公表し、国際的な連携によって雑草汚染の防止に取り組んでいます。

このように、雑草害という生物的災害 (Biohazard) の撲滅を目的として開発された科学の粋である除草剤ですが、一方、日本においては除草作業の代替手段として普及することになります。しかし、単に雑草を楽して取り除く手段としての除草剤の普及は、雑草害の根本的解決にはつながりませんでした。毎年出荷される除草剤の金額は千数百億円にもなりますが、これが雑草害の経済的損失の縮減という結果を生んでいないことは明らかです。そもそも除草剤

使用の価値は、雑草害を根絶することによって生まれる経済的利益の多寡で評価されるのが基本です。このため、欧米の薬剤の許認可には環境および経済的利点の優位性が求められるのに対し、日本では手取り除草や先発除草剤との比較効果試験の結果で評価されています。その結果、類似品など無数の除草剤が許認可され販売される事態になっています。そして使用に医者や薬剤師の診断・処方が求められる医薬品などと異なり、これらは個人の判断だけで自由に使われているのが現状です。目的に照準を合わせていないこのような対処的な除草剤の使い方は、当然、社会に化学薬剤の乱用や環境汚染を引き起こすことになり、除草剤による薬害や汚染はニュースとしてメディアが取り上げます。他方、市民・住民も除草剤が「何のため」に生まれたかを知る由はありません。昨今顕在化しているのは、外来雑草と生物多様性の劣化、アレルギー雑草と児童のアレルギー発症、雑草ハビタットと病原媒介昆虫、多年生雑草と土耕採食性有害哺乳類の増加、刈取り雑草バイオマスとCO₂排出、乾燥雑草 (dry vegetation) と山火事、雑草マウントと斜面崩壊、国際的汚染雑草と非関税障壁等々、多様な因果関係に基づく雑草害です。雑草生態系に関わる科学リテラシーを高め、確立された技術を活用していくなかで適所適材的な除草剤利用が、今日の緑地雑草害対策にまさに求められることなのです。

編集後記・募集

近頃は暖かい日が続いており、春の訪れを感じます。今年の冬は事務所周りにも雪が降り積もりましたが、それらもいつの間にか溶けてなくなり、今は春雑草が伸びてくるのを目にするようになりました。今年の雑草がどのような姿を見せてくれるか、少し楽しみにしています。

さて、ニュースレターも今号の発行で17回目となりました。次回、第18号(6月刊行予定)について、会員の皆さまのご協力を頂きたく、下記のコーナーへのご投稿をお願いする次第です。

- ・テーマ“困っている雑草”について、意見や技術情報など
- ・自由投稿：日頃の気づき、主張したいこと、技術・文献紹介等

- ・所属団体・企業の紹介

今号またはこれまでの記事についてのコメント、質問なども歓迎します。

ご連絡先：佐治健介 (k-saji@bousou-ken.org)

ページ編集：宮井駿 (京都大学雑草学研究室院生)